

追悼 久武哲也先生

In Commemoration of Professor Tetsuya Hisatake

まえがき	(高木彰彦)
久武さんと蔵書	(源昌久)
久武哲也さんの思い出	(山本健兒)
久武哲也先生の思い出	(堤研二)
久武先生からの長い手紙	(遠城明雄)
兵庫地理学協会と久武哲也先生	(大城直樹)
久武先生からいただいた宿題	(福田珠己)
二週間のアメリカ集中講義—久武教授と生徒今里	(今里悟之)
久武先生がいた世界	(森正人)
記憶のなかの久武哲也先生	(島津俊之)
地理思想科研と久武さん	(山野正彦・水内俊雄)
久武先生から与えられた課題	(高木彰彦)

まえがき

甲南大学文学部教授久武哲也氏は2007年7月28日、胃ガンのため逝去された。享年60歳。久武氏は、1980年に日本で開かれた国際地理学会議IGCを機に開始されて以来、今日まで継続的に実施されてきた科研費による研究（地理思想科研）の最初からのメンバーであった。この間、1995年から代表者となった水内俊雄氏によって、科研費を利用して本誌『空間・社会・地理思想』が創刊された。その後何回かの中断をはさんで、水内俊雄氏が二回、山野正彦氏が一回、そして現在、高木が代表者となって、地理思想科研は継続されるとともに、『空間・社会・地理思想』も昨年度で11号を数えるに至った。2006～2008年度の3年間にわたって研究費を交付された現在の科研においても、久武氏にはメンバーに加わっていただいたが、病魔との闘いの故であろう。同氏は研究集会に一度も参加されぬまま帰らぬ人となってしまった。それにしても、現役のメンバーが科研費の研究期間中に亡くなるということはそう

そうあるものではない。何らかの形で久武氏のことを科研費の活動記録に留めたいと思い、昨年1月に開かれた研究集会の際に、科研費の研究成果報告書をも兼ねている『空間・社会・地理思想』に追悼文を掲載する企画を提案し出席者の了解が得られたので、本号にこのような企画が実現する運びとなったのである。本号は本科研費の最終年度に刊行される号でもあり、追悼企画としては相応しいものと考え。この追悼企画には、研究協力者も含めた科研メンバーのうち12名が寄稿している。当初、久武氏の略歴および研究業績を掲載するつもりだったが、予想以上にページ数が増えたため、10ページ近くにおよぶ膨大な研究業績は割愛することにした。久武氏の研究業績については、甲南大学文学部発行の『歴史文化特集』154（2007年度）に「久武教授を悼む」として特集号が刊行されているので、そちらを参照していただきたい。

久武哲也氏の略歴（甲南大学文学部『歴史文化特集』より抜粋）

昭和 22 年 2 月 熊本県に生まれる
 同 40 年 熊本県立鹿本高等学校卒業
 同 41 年 4 月 京都大学文学部入学
 同 45 年 3 月 同上 卒業
 同 46 年 4 月 京都大学大学院文学研究科修士課程入学
 同 48 年 3 月 同上 修了
 同 48 年 4 月 京都大学大学院文学研究科博士課程入学
 同 51 年 3 月 同上 満期退学
 同 51 年 4 月 京都大学文学部助手
 同 52 年 4 月 甲南大学文学部専任講師
 同 55 年 4 月 同上 助教授
 平成 2 年 4 月 同上 教授
 同 16 年 4 月 甲南大学文学部長(平成 18 年 3 月まで)
 同 19 年 7 月 ご逝去

最後になったが、この追悼企画を組むことを快諾して下さった久武信子氏および資料提供の便宜を図っていただいた甲南大学の鳴海邦匡氏に記して感謝の意を表したい。(高木彰彦 記)

久武さんと蔵書(源昌久)

筆者が甲南大学教授であられた久武哲也氏と最初にお会いしたのは、1980 年に京都で開催された IGU 地理思想史の集会であったはずだが記憶にはない。1980・1981 年度文部省科学研究費補助金総合研究 A、研究課題「地理思想の伝播と継承に関する比較研究」(研究代表 竹内啓一)へ参加した折、久武さんとお話したことが思い起こされる。彼(1947 年 2 月生まれ)と私(1946 年 12 月生まれ)とは同学年であり、前記の科研参加以来、20 年以上の研究者同士(正確に表現するならば、彼は師というべき存在)であった。地理学プロパーでない筆者に対し、氏は様々な地理学の新知識をはじめとし地理学界の諸事情を教授してくださった。

拙稿の抜刷をお送りすると、必ず丁寧なコメントを記した返信をいただいていた。しかし、ここ数年位前から返事をいただかないことがあった。おそらく、勤務校で要職に就任し多忙なためであったか、あるいは、体調がすぐれなかったためだったのであろう。今、筆者の手元には、拙稿「石井(第七三)部隊と兵要地誌に関する一考察：書誌学的研究」を献呈した際の返信の文章(2002 年 1 月 19 日付け)

がある。便箋 2 枚に几帳面な字でお礼、コメントが書かれている。この手紙の中で、彼は、「外邦図作成史」への強い関心をのべ、陸地測量の部隊名(兵団文字符)と活動地域についての問いを記している(筆者は後日、研究会でお会いした際に参考資料を提示)。彼は常に研究テーマに関し、貪欲と形容してもよいくらいの知的好奇心を有していたと思われる。

筆者は書誌学を専攻している者として、「書物」、「資(史)料」に自然と眼が向いてしまう。彼の蔵書量の多さについては、研究者間でしばしば話題になり、言及されてきている。2007 年 9 月 29 日に甲南大学において「久武哲也教授追悼学術講演会」が開催された。閉会后、構内の氏の研究室を小林 茂大阪大学教授、久武夫人等と訪れた。研究室内は、窮屈なほどに書物類でぎっしりと詰まっていた。私は専門分野の関係から蔵書家と言われている方々の書斎、研究室を幾度となく拝見させていただいている。久武研究室の蔵書の排架法は、今までに経験したことのないシステムであった。図書が書架の奥から手前へ三重に詰め込まれて排架されていた(通常は最大限二重まで)。当然、その状態では奥に位置している書物のタイトルを見ることはできない。書架に並べてある図書・資料は、彼独自の分類によって研究テーマに沿って主題・地域をミックスしてグルーピングされ、「観光関係」、「移民関係」等の項目(ただし、既存の図書分類項目の概念ではない)に分けられていた。このことを筆者はすぐに把握した。しかも、その項目がチェーン式に関連分野で隣接している場合が多くみられた。例えば、「洋学関係」の項目の上段の書架には「日本人の漂流記類」の項目に関する図書が排架されているように。この方式ならば、奥に隠れている資料でも推測し、検索しやすい。本排架上の分類法は、氏の思考体系を視覚的に理解させるツールのひとつとなるであろう。書物の中には茶色の紙カバー(包装紙あるいは使用済み大型封筒の裏面を再利用)が掛けられ、タイトル等が手書き字で記載されている。書籍の間にはコピーをした資料がフラット・ファイルに収められ、見出された。これらの資料の「背」にも彼の読み易い字形で資料名・著者名が書かれている。久武夫人のお話によると、自宅のマンションには住居用の部屋とは別に書庫用の部屋をさらに用意したとのことである。

久武先生が本の蒐集趣味からではなく研究遂行用として購入・収集された書籍・資（史）料が、彼の地理学知と共に後継者達に受け継がれていくことを切に希望する。

合掌

久武哲也さんの思い出（山本健児）

久武さんに最初にお会いしたのがいつであったか、残念ながら思い出せない。おそらくは、1980年8月の日本での国際地理学会議（IGC）のうちに、水津先生主催になる京都の京大会館での地理思想・地理学史のプレコングレス研究集会の際に、竹内先生に誘われて私も参加したので、この時が初めてだったと思う。この時に野澤さんとお話した記憶は残っているが、久武さんと言葉を交わした記憶は残っていない。

しかし、同じ年の秋だったか、あるいは翌年の夏だったか、これまた記憶が定かでないが、八王子の大学セミナーハウスで行われた竹内先生を研究代表者とする地理思想に関する科研研究集会での久武さんの姿は、今に至るまで私の頭の中に強烈に残っている。この研究集会は2泊3日で行われたはずだが、午後の比較早い時間に集合し、直ちに報告と討論が始まり、夕食後もそれが続き、最終日も午前中はたっぷりと報告と議論がなされるのだが、2日目の朝に、応地さんと野澤さんが、「いやー、まいったまいった」という調子でセミナー室に現れたのである。ほぼ同時にセミナー室に來られた久武さんは、あの細い目をさらに細くして満面の笑みを浮かべていた。いったいどうしたのかと思ったら、応地さん、野澤さん、久武さんの3人が同室に起居し、一晩中、お二人が久武さんの説教をくらわれたというのである。その内容はというと、「学問をしているのか」という趣旨で、久武さんがご自身よりも先輩のお二人を相手に議論を吹っ掛けていたらしいということが分かった。

その当時、私は京都大学地理学教室卒業生の卒業年次の違いについてほぼ無知だったが、それでも久武さんがお二人よりも若いということは風貌からして明らかだった。私ならば自分より数歳以上年上の

先輩をつかまえて説教するなどということは想像もつかない。多少とも話題が弾み、楽しい議論になったときに自説を譲らず、という程度ならば、私も先輩諸氏に伍して議論に参加することもありうると思うが、それでもどちらかといえば聞き役にまわるだろう。そんな私から見たら、久武さんは破天荒なことをする人だった。とはいえ、久武さんが礼儀をわきまえないというわけではもちろんない。

それどころか、その八王子での研究集会をきっかけに、その後20数年間、学会などでお会いすれば、私のようなものにも分け隔てなく接していただいた。科研研究集会では夜遅くまで飲みながらさまざまな話題をめぐって談笑した。そのほとんどは忘却の彼方であるが、なぜか次の他愛ない話題が忘れられない。いつのころだったか、グリコ社社長の誘拐事件が起きた時、警察が「キツネ目の男」を実行犯の一人としてその似顔絵をもって公開捜査したことがある。研究集会の夜のアフターゼミで誰が言い出したのか忘れてしまったが、久武さんの目のあたりがその似顔絵に似ているねえ、と言ったのをきっかけに、グリコ事件、キツネ目の男、久武さんの三題話がひとしきり話題となった。それも1回で終わることなく、世間でグリコ事件が報道され続けていた限り、何度かの研究会合宿の夜の飲み会で話題となった。その間、久武さんは終始にこにこしてこの話題におつきあいくださるだけでなく、グリコ事件のなんたるかを解説して下さったように記憶している。

竹内先生が亡くなられて、先生の思い出を多くの人に寄稿いただいて追悼集を編集した際には、久武さんからも、私の知らない竹内先生の姿を短い文章にまとめてご寄稿していただいた。その内容が、竹内先生の書かれていたエッセイの内容と齟齬があったので、久武さんにe-mailで問いあわせたところ、根拠を示されてご自身の記述の方が正しい旨、すぐ返信いただいた。そのころ、すでに久武さんは病魔に侵されて闘病生活をおくっていたはずであるが、そのことを全く知らないまま、迅速かつ正確なご返信に感嘆かつ感謝したものである。のみならず、久武さんが竹内先生から地理学界と竹内先生ご自身の生い立ちなどについて、さまざまなことを聞いていらっしやったことも、久武さんの文章で知った。だから、いずれお会いしたときにゆつくりと竹内先生

の思い出話をお聞きしたいものです、と返信した記憶がある。そして、その年の秋に、人文地理学会大会のおりに会場で久武さんとお会いした際には、数年ぶりの再会だったが尋常ならざる痩身ぶりにびっくりした。そして、それが久武さんとの最後の短い会話となった。久武さんの告別式、追悼会などに、参加したいと思ったものの、たまたまドイツに出張していたり、校務のために参加断念を余儀なくされたりした。申し訳ない気持ちでいっぱいである。

『人文地理』の編集委員長だった頃には、「展望論文がなかなか集まらないので山本さん、何か書いて投稿してくれない」と何度か慫慂されたこともある。久武さんの在任中にその慫慂に応えることができなかったことが、今となっては詮無いことではあるが、口惜しい。

久武哲也先生の思い出（堤研二）

九州自動車道を菊水インターチェンジで降りて東へ向かうと、やがて菊池川を見ることになる。そこで夏に車内に涼しい風を入れながら走るのも心地よい。最近では国道沿いに店も増えたが、もともとは緩やかな丘陵と水田の広がる地域であった。その菊池川の先に私の父方の先祖の眠るかきもとまちくたみ鹿本町来民の街があり、現在は山鹿市内となっている。豊かな農業地帯を流れるこの川や、上流にある水の冷たい菊池溪谷や、さらに遠からぬその先にある大分県津江地方は私にとって愛着のある場所である。菊池川は久武哲也先生の絵の対象でもあった。

私の義理の伯父と従姉は今もこの鹿本の地に住む。従姉妹たちと従兄は鹿本高等学校の出身なので、久武先生の後輩にあたり、その一家は久武先生のお父上を「久武先生」と呼んでいた。伯父や従姉妹たちの話し方は、どこか緩やかで、合間に「ほ」（「ほれ」、「ほら」の意味）という、実にまったりした言葉が入る。久武先生も酔いがうまく回ると、私の九州弁に対して「ほ」という言葉に「バカたれ」という慈愛のある説教言葉が挟まりだして、私はそのことをいつも密かに待ちながら、杯を傾けた。久武先生の話しぶりは、私にいつも自分のルーツの地のことを想起させた。久武先生と飲んだ酒に、まずい酒は一

度もなかった。そして、どんなに酔っても飲んでいる時の事は鮮明に覚えておられたようだ。

久武先生は普通の文化地理学者ではない。その博覧強記ぶりは、故・竹内啓一先生と並んで空前絶後であったと思う。引出しがたくさんあり、その中に色んなものがぎっしりと詰まっていた。若い時に小林茂先生と行かれた阿蘇・菊池川流域での農村調査の話や、ラッツェルの『政治地理学』の話を開くのは楽しかった。私が焼畑後に自生する山茶の話をした時、久武先生は近世の五木村での茶生産を相良藩が奨励したことに関する論文を紹介して下さいました。

先生の本好きと収集状況は尋常ではない。つい先日、信子夫人と会食する機会があったが、久武先生には本棚に数層にわたりびっしりと隙間無く本を並べる特技（？）もあり、本棚と天井の間にも本が隙間無く詰められていたために、阪神・淡路大震災の折にも御自宅の本棚は倒れることがなかったということだ。

久武先生は逝ってしまわれたが、ご家族と故郷を愛し、学問と美術と酒を愛した久武先生の思い出は尽きることは無い。菊池川を渡る度ごとに、私は心休まる雰囲気に入りながら、きっと久武先生のことを思い出すだろう。

久武先生からの長い手紙（遠城明雄）

私が、「地理思想史」科研にはじめて参加させていただいたのは、九州大学の助手に採用された1992年でした。当時、野澤秀樹先生が研究代表者を務められており、私は研究合宿の準備などのお手伝いをさせていただくことになりました。この合宿は、昼間の研究発表での活発な討論から深夜に及ぶ飲み会にいたるまで、大変知的刺激に満ちたもので、故竹内啓一先生や山野正彦先生、そして久武先生が、最後まで話の輪の中心にいらっしゃる姿を拝見して、研究には知的的好奇心とともに、体力が必要だと痛感したことを思い出します。

残念ながら、私は久武先生と日常的に接する機会を持つことはありませんでした。ただし、その代わりといえるかどうかわかりませんが、私から質量ともに乏しい発表論文をお送りすると、先生から多数

の分厚い抜刷と拙稿の内容に関わる長い手紙をいただくという知の「不均等交換」を何度か経験しました。回数こそ少なかったものの、その内容は現在でも私にとって大変貴重な示唆となっており、また大きな研究課題であり続けています。

大著『文化地理学の系譜』(2000年)を上梓された頃の手紙で話題の中心となっていたのは、E.カップの研究でした。偶々、野澤先生が、カップを「政治地理学」のキーパーソンとして論じたC.ラフェスタン(ジュネーヴ大学)らの『地政学と歴史』(1995)というテキストを授業で輪読されており、私がその一部を翻訳(『空間・社会・地理思想』6号, 2001年)したこともあって、久武先生のご関心と重なる部分があったのではないかと思います。

ラフェスタンは、『比較一般地理学』(1868)という著作から、カップを「政治地理学」の基本構想を打ち立てた人物と位置づけたのに対して、先生は『技術哲学要綱』(1877)という著作も踏まえて、その「文化地理学」の構想により大きな可能性を看取されていました。

(『技術哲学要綱』で)「非常に面白いのは、「政治地理学」は「文化地理学」の一部(政治の文化への統合)を構成すると考えられていることです。いわば現在の「文化の政治論」に近い考え方になっている所です。それはやはりヘーゲル左派(あるいはカント的マルクス主義)の底流と繋がっていると思います。しかしラツェルは最終的に文化を政治地理学に統合していきます。」(2001年8月15日付)

(カップの)「文化地理学は基本的に「労働」、「所有」、「資源」、「エネルギー」あるいは「機械装置」などを含んだものです。いわば経済地理学といわれるものを包摂した文化地理学です。ヘーゲル左派として文化地理学を「経済」の上に立つものとして考えていく方向を見とることができます。……カップの「政治地理」はヘーゲルの「歴史哲学」の方の影響の一番強い部分で、どうも「文化地理学」の方が後に出て来たように思います。それは一八四五一七年の「ヘーゲル左派」の内部的対立の後に出て来る考え方の様な気がします。この「ヘーゲル左派」の中に「マルクス」も居るわけですから、カップはラツェルよりマルクスに余程近いわけです。ラフェスタンは異和感を持つのは余りにカップを「ヘーゲル右派」的に見すぎているという点です。この点でカップは「近代産業社会」を視野に入れた「文化地理学」の構想を得たというのが私の解釈です。」(2002年7月5日付)

ここにはカップの構想に対する評価を通して、最近の文化地理学の転回にとどまらない、久武先生ご自身の研究関心を構成していた二つの基本的視点が表れているように、私は思います。ひとつは「文化」を「政治」との緊張関係で把握するという視点です。それは、マルクスやスピヴァックを参照し、ご先祖のホノルルでの体験にも触れながら、「表象 darstellen」と代弁(代理) vertreten の相互関係(共犯関係)こそが実践の場である(マルキストがかかわるべき場である)」(2006年5月26日付)と記されていることからもうかがうことができます。もうひとつは、「労働」や「道具」という視点です。「本当の「労働」の日常的なかたち」を考察することで、「地理学、とくに文化地理学も新しいかたちと批判力を持ち得るものに成熟していくことと信じます」(2000年12月24日付)という指摘は、「労働」の変容に直面する我々に大きな課題を投げかけられているといえるでしょう。

先生は、現在の科研(2006~08年度)に参加される際、「もう一度カップを取り上げてみたい」と言われていました。残念ながら、それは実現されなかったわけですが、敢えて推測すれば、その方向性は以上の視点をより深めることにあったのではないのでしょうか。

兵庫地理学協会と久武哲也先生(大城直樹)

同じ神戸の大学ということもあって久武先生からは様々なかたちで御高誼をいただいた。お世話になりっぱなしの挙句、恩返しじみた事さえてきぬ間に先生が逝かれたことに忸怩たる思いばかりが募っていく。大学院生時代から地理思想部会などで色々のご指導いただいてきたのであるが、1997年10月に神戸大に赴任して以来、より「濃い」お付き合いをさせていただくこととなった。赴任当初暮らしたアパートが、甲南大学岡本キャンパスのほぼ西隣にあったため、兵庫地理学会の例会の後などに、あの古本屋の倉庫のような研究室で酒を飲み交わさせていただくこともあった。むろん徹夜である。阪神間や神戸の大学で育った若手の研究者の中には、同じ経験をされた方々がずいぶんおられることだろう。

（沖縄風に言うと）山学校・海学校ならぬ酒学校もずいぶんあった。部会後や科研合宿の時にもおよそそうであったが、先生はそうした避けては通れぬ酒宴の主役であった。さて、この種の話は他に適任の方が書かれるであろうから、ここでは話題を替えて、久武先生の学会への貢献の一端について、おそらくはあまり知られていないであろう地方学会の一つである兵庫地理学協会での先生のご活動について、短いながらも紹介したいと思う。

兵庫地理学協会は1947年に設立され、機関紙『兵庫地理』は53号（2008年現在）を数える。先生は、その8代目の会長であった。関西圏にも教育学部系も含めていくつか地方学会はあるが、それぞれの活動の詳細についてはそれほど知られているわけではない。兵庫地理学協会は戦後間もなく、神戸大経済学部の田中薫教授を中心にアカデミアの内にも外にも開いた学会として結成された。久武先生はまさにこのコンテクストを了解されておられ、会長になられて以後、このことを踏まえて協会の運営に当たられた。

『兵庫地理』に掲載された先生に関する記事を挙げていくと、まず第23号（1978年）で、「協会通信 会員消息」の項に「甲南大学地理学研究室へ久武哲也（京大助手）氏が昭和52年10月1日付着任」とある。これがデビューである。彙報に掲載された先生の学会での役職を記すと以下になる。評議員（1982～87年）、集会・庶務委員（1988～89年）、集会委員（1990～92年）、評議員（1993～96年）、副会長（1999年）、協議委員（2000～02年）、会長（2003～06年）。着任早々の時期と在外研究でハワイにおられた時期前後を除いて、ほぼすべて何らかの役職を担当されていたわけである。

発表・コメント等をみると、1977年12月（第203回例会）に「インディアン」の石臼、1982年12月（第254回例会）に「アメリカインディアンの絵図—オジブワ族の場合」、さらに1998年8月（夏季研究大会）には「ハワイにおけるさとうきびプランテーションとエスニック構造—マウイ島を事例に」と題する発表を行われた。この大会後、「甲南大学周辺の震災復興状況」を視察するミニ巡検が行われた。案内者は久武先生である。先に触れたが、巡検後の懇親会では、阪神間の大学院生や若手研究者を相手

に大いに気炎を吐かれ、叱咤激励された。こうしたことは幾度となく繰り返されたが、昼の部でも夜の部でも、先生はまさに重要（要注意？）人物であったのである。

2003年5月には「文化地理学の発展とその課題」（第49号に要旨掲載）なる発表をされたが、これは、この報告後の総会で会長に就任されたため、実質的には会長就任講演のようなものであった。パークレー学派のみならず、英語圏の文化地理学の最新の潮流まで読みこなされていた先生の学への執念には本当に驚かされる。

会長になって熱心に取り組まれたのが、地域連携事業であった。2004年10月には協会の「溜池研究グループ」による巡検（明石市村崎疎水～江井ヶ島）の案内を田中眞吾元会長・南埜会員・森下会員とともにされた。協会では2003年から「いなみ野ため池ミュージアム創設プロジェクト」を推進している。『兵庫地理』第51号は「兵庫のため池」特集となっている。2006年11月の特別例会は、シンポジウム「ため池の維持・保存に地理学はいかなる役割を果たせるか」であり、岸本一幸会員の報告「稲美町におけるため池群の保全に向けての問題点」へのコメンテーターとして、先生は近世絵図を示しながら熱く語っておられたが、これが協会では最後の発表（報告）となってしまった。“Land and Life”... 水利・利水はその生命線である。溜池とその水路とはまさに所与の土地環境に対する人間の知恵と労働が生み出す結晶であるだろう。先生の早すぎる晩年の関心がここにあったという事実には単なる符丁以上のものを感じるのである。なお第53号には長谷川孝治現会長による紙碑「久武哲也 前会長の逝去を悼む」が掲載されている。こちらも参照されたい（本稿は、第94回地理思想部会（2008年9月20日開催）でのコメントに加筆したものである。）

久武先生からいただいた宿題（福田珠己）

久武先生の思い出を書き起こそうとして、あらためて気付いたことがある。私がまだ徳島勤務だった頃、地理思想研究部会でお目にかかったのが、「活字」以外で先生に直面した最初のことであるのだが、

よく考えてみると、先生と時を共有する機会は何ほど多くなかったような気がするのだ。また、書き残すべき出来事も全く思い浮かばないのである。

多くない、というのは私の錯覚かもしれないが、それにもかかわらず、今、振り返ると、先生から大きな宿題を課せられたような気がしてならない。「課せられた」というのも私の錯覚、あるいは妄想なのかもしれないが、これまで鬼籍に入られたどのような方に対しても経験したことがなかったということは、確かである。

先生から勝手にいただいた宿題は二つある。一つは、「アメリカ先住民と博物館展示についての研究を着実に進めよ」ということである。どのような状況でこのメッセージを（勝手に）受け取ったのか忘れてしまったが、アメリカ文化地理学と先住民研究についてお話しているなかで、目下、博物館展示の政治性やジオラマに焦点をあてて研究をしていた私に向けておっしゃったように記憶している。この点については、「なぜいまさらこんなことを・・・」と思い、しばらく私は自分の関心の外に放り出していた。先住民と博物館展示をめぐる研究は数多く、また、日本人の手によっても成されている状況で、私に何ができるというのか。そして、そのような研究状況をご存知の先生が、なぜ、このようなことをおっしゃったのか。今、勝手に解釈すると、先生のメッセージは、「この課題に取り組み」というようなものではなかったのだろう。アメリカ文化地理学とそれが生まれてきた社会・土壌を見据えた、地理学徒ならではの博物館研究の展開を示唆されていたのかもしれない。そう思うと、美味しそうに見えるネタをつまみ食いする癖がある私には、その基盤を問われるような大きな宿題なのであろう。

もう一つの宿題もまた、難しいものである。それは、「異質性と均質性の間を振り子のように揺れ動くような思考の連続から、「地域文化」論の新たな地平が生まれる」と結んだ拙文に対するコメントに派生するものである。先生は「振り子のように揺れ動いていたのではいけない」とおっしゃったのである。確かに、言葉足らずの、そして、格好を取り繕ったような表現ではあったのだが、そのような行き方を即座に否定された先生の真意は何だったのだろうか。また、先生ご自身は、自らの立ち位置をどこに置か

れて未来を見据えられていたのか。文化地理学に関する先生の次なる論考に接することのできない今、想像し、そして、自ら考えていくしかないのは確かなことである。

いずれの宿題も私の思いこみの産物なのかもしれない。けれども、確かに、先生は、短いメッセージを通して、私たちに何かを残してくださったのである。たとえそれが錯覚や妄想であっても、受け取った個々人がその課題に四苦八苦する様をどこかで見ておられるのではないか。そのように思い、歩んでいきたい。

二週間のアメリカ集中講義

—久武教授と生徒今里（今里悟之）

久武先生から近しく薫陶を受けるようになったのは、阪大の助手時代からである。先生との思い出といえ、2002年秋に大教大へ転勤する直前、当時の上司であった小林教授の命により、先生と2人で派遣されたアメリカでの外邦図（旧日本軍作製の海外地図）調査に凝縮されている。費用節減のため、移動はすべて格安料金のノースウエスト航空（アメリカ人の知人がそのサービスを「not worst 最悪ではない」と評する会社）で統一された。

関西空港からデトロイト経由でワシントンへと飛ぶ機内では、先生は隣の台湾人とずっと英語で会話を楽しんでいたが、私はすやすや眠っていた。ワシントンの空港からホテルまで、先生は教育的配慮からあえて私に道中を先導させ、乗換の煩雑な路線バスと地下鉄の利用を指示された。その方針はアメリカ調査中、終始変わりがなかった。ホテルに辿り着いたのは夜の9時半で、官庁街のため周りにレストランもなく、ビールとピーナッツだけで夕食を済ませ、ホテル側の勘違いで割り当てられたダブルベッドの部屋で、ステテコ姿の先生と適正な距離を保ちつつ、一夜を過ごした。

ワシントンには5日ほど滞在し、調査先の議会図書館では、二人がかりで朝から夕方までひたすら資料を筆写した。夜ごと、調査方針について先生の部屋で検討会を行ったが、いつしか私が瞑想することもしばしばであった。休日は市内を一日中みっちり

歩き回り、豪華にも先生の専属解説つきで、世界各地の先住民資料なども展示されたスミソニアン博物館を巡った。アメリカ旅行は初めてだった私には、秋の澄んだ青空と強い陽射し、北極のような寒さの冷房にも平然とする肥満体の人々の群れが、今でも心に焼き付いている。

次の目的地ミルウォーキーに向かうため、ワシントンのホテルを発ったのは真夜中の3時であった。格安航空券の強行スケジュールに翻弄され続ける学界重鎮を、私はそれまで見たことがなかった。しかし先生は常に冷静沈着でエネルギー満ちた人であった。デトロイトを経由してミルウォーキーには朝10時前に着いた。ここで4日ほど滞在し、ウィスコンシン大学図書館内のアメリカ地理学会(AGS)地図室で、朝から晩まで調査に勤しんだ。ここでも私は、未整理資料も含めた、地図の書誌的データの要点や調査法を肌で学んだ。海外調査に長けた研究者でも難しい黒人独特の英語も、先生は易々と聞き取り、冗談を言い合っておられた。

最後の目的地ハワイには、朝6時に起きて出発した。ミネアポリスを経由してホノルルのホテルに着いたのは、夕方5時であった。ホノルルは先生のお母様が生まれられた街で、2日余りの滞在中、ハワイ大学図書館で調査したほか、先生の「想い出の地巡り」にご一緒した。お母様の旧居は跡形もなく、ショッピングセンターの巨大立体駐車場になっており、先生はその様子を橋の上から静かに見つめておられた。夜の繁華街で年老いたハワイ系女性から商売のビラを渡された時には、疲れていて受け取りを断ろうとした私を、「もらってあげなさい」と優しく窘められた。先生がかつて1年ほど住まれた高層マンションは健在だったが、先生は突然「今里、競争だ」と言いつつ、川べりの歩道でウォーキングを始められた。これほど高速で平行移動する人類を見たのは、私は後にも先にもこの時だけである。文献の精緻な読み込みだけでなく、綿密な野外調査に耐え得る丈夫な足腰を身につけることを学生にも指導されていた、先生の姿勢を示す後姿であった。

ハワイのホテルの部屋では、調査全体の総括をした後は、ビールをぐいっと飲みつつ、若き頃のアメリカ放浪記など、先生の楽しいお話は尽きなかった。いつしか私は夢心地で舟を漕いでいた。この2週間

のアメリカ調査中、そしてその準備段階からも折に触れ、先生のご研究のこと、私自身の村落研究へのヒント、学問への姿勢など、先生のお言葉や後姿から学んだことは計り知れない。久武先生がもし、もっと大きな地理学教室でたくさんの大学院生を指導する立場にあったならば、今の日本の地理学界はもっと変わっていただろう。先生の「集中講義」の要点は、すべてメモにとってあり、このアメリカ調査以降に私が書いた論文、そしてこれから書く論文の謝辞に、久武先生のお名前があるとすれば、そこには先生のアイデアが息づいている。

久武先生がいた世界(森正人)

2006年8月某日。それは最後に久武先生に会い、梅田で呑んだ日。すでに大手術をしてげっそりと痩せた久武先生は、しかしその日、一日に一杯と決めていた生ビールを三杯、タバコを数本吸った。体の調子が悪いことを知っていたが、呑みながら話してくれる久武先生を僕は止めなかった。そのときは、ブルーノ・ラトゥールをよく読み、イデオロギーを作り出すアクターの細かな役割に注意する必要を強調されていた。思えば、これまで久武先生はずっとそれを繰り返されていた。

1998年に大学院に進学した僕は、ハワイから帰国したばかりの久武先生に講義と講読で合計4年間お世話になり、学振特別研究員の指導教員もお願いしていた(審査に合格したことはなかったが)。講義では西洋やアメリカ先住民の地理思想や文化概念が解説され、講読ではMike CrangとDon Mitchellそれぞれの*Cultural Geography*、新しい文化地理学に関する論文を読み、また*Dictionary of Human Geography*のcultural geography欄の変遷を検討した。そうした中で久武先生は、新しい文化地理学の視角を評価しながらも、イデオロギーと物的生産の結びつきを検討するよう求められた。権力やイデオロギーの作用を強調され、高山宏の『われ山に帰る』、カール・マルクスの『聖家族』を読むよう勧められた。2000年初頭にド・セルトーが流行したときには、戦術/戦略の二分法に目を奪われるのではなく、そうした議論の成立過程をきちんととらえるように

論され、思想史とはそういう難しいものだと思います。イデオロギーへの徹底的な批判、地道な思想的軌跡の理解。それらは彼のこれまでの人生の歩みを振り返ると理解できる。

他方、僕にとっての久武先生は酒を共に呑む「タケちゃん」でもあった。初めて一緒に酒を呑んだのは1998年の夏。とあるところで発表をしたところ、二次会で延々と説教された。僕が三重大に職を得たときにはお祝いということで、西宮北口の居酒屋で呑みに呑んだ。就職を祝ってくれたかと思えば、国の世話になりやがってと叱られる。どちらも彼の本音だったのだろう。その日も彼は焼酎お湯割り梅干し入りの独特の呑み方で時間を過ごした（アテはいつもタコ酢）。焼酎は梅干しを食べることなく飲み干され、追加の際には同じグラスに梅干しもう一つ追加させ、最後に梅干しだけを数えながら食べる。その日の梅干しは十個を超え、西宮北口駅のホームで、へべれけに酔っぱらったタケちゃんはホームを出て行く阪急電車で深々とお辞儀をしていた（僕は一生その光景を忘れない）。

三重県に移ってから大阪に行くたびにタケちゃんと呑みに行った。巡検に行くとバスの中で人知れず一定区間の道路標識や看板などを数え、フィールドノートをつけていることを話された。他方、重いカバンを持っているのは筋トレであること、高校時代のラグビー部のこと、ヤクザとの喧嘩、若い頃の恋愛と失恋などなども話された。どちらの話題も大事だった。

出国直前に会った別れ際に再会を約束したが、僕の帰国2ヶ月前にその約束はこの世では果たされなくなった。2006年に会った数日後に久武先生からアイルランドに行けば「宗教が見えるでしょう」というハガキをいただいた。最後の最後にいただいた言葉もまた、宗教というイデオロギーを自分でその場で感じなさいという彼独特の哲学だった。彼の死後、2007年夏、約束の地アイルランドに向かう。

久武哲也という巨人がこの世を去ってから1年半、私たちは彼の存在がいかに大きかったかしばしば思い知らされる。でも私たちは何も失っていない。久武哲也という天からの贈り物を天に返しただけなのだから。一つの死はその世界の全面的な終焉であり、久武先生に対して開かれていた一つの世界は終焉を

迎えた。私たちがその度ごとに作り直される世界にいるとすれば、それもまた前進だと思いたい。

さよなら、久武先生。

記憶のなかの久武哲也先生（島津俊之）

わたしと久武先生との関わりの度合いが、先生と同世代の方々や、先生から直接に研究指導を受けた方々、あるいは先生と日常的に接することが多かった方々と比べて、どの程度のものなのかはよくわからない。はじめて久武先生の生の声に接したのは、確か1983年だったと思うが、非常勤講師として立命館大学で地図学を講義されたときに、受講生の一人として教えを受けたのが始まりである。分厚い資料のコピーを用意され、それほど多くなかった受講生を前に、「イマゴムンディ」や「マップムンディ」などといった、初めて聞く奇異な響きの、しかしまだに記憶に残る印象的な語句を交えた地図学史の講義を展開された。わたしは毎週欠かさず出席する真面目な学生では必ずしもなかったが、久武先生が稀にではあったが口にされた「ヒューマニスティックジオグラフィー」という言葉にワクワクした記憶がある。この先生はそういうことに詳しいんや、という期待を抱かせる講義だったように思う。先生は出欠に寛大であったように思うが、ある時「歴史地理学でいう〈時の断面〉を測ってみましょう」という意味のことを言われ、不意に出席を取られた日にたまたま居合わせてホッとしたことも懐かしい記憶である。確か原稿用紙20枚くらいの重いレポートを課せられ、四苦八苦しつつも結局半分くらいしか書けず、それでも確かA評価で通していただいたように記憶している。学部学生にとって寛大な先生という印象は、いまだに消えず残っている。

3年かかって書いた修士論文を、1988年5月28日に京大会館で開かれた第15回地理思想研究部会で発表させていただいたとき、代表世話人を務めておられたのが久武先生であった。予定時間より少し遅れて会場に来られ、確か一桁台の出席者のお一人であった服部昌之先生が少し小言めいたことを仰られた。その部会で久武先生からどのようなご意見をいただいたかは記憶していないが、その論文を『人

文地理』に投稿し、まだ掲載通知を受け取っていない時点で、学会の懇親会の席上で久武先生が不意に近寄ってこれ、掲載が内定した旨を教えていただいたというエピソードもあった。未熟な気負いばかりが先立ち、決して行儀の良い存在ではなかったはずの当時のわたしに、内心はどうであったかはともかく、久武先生はつねに丁寧に接して下さったように思う。なかなかできないことである。

その印象が一変したのは、いわゆる地理思想科研のメンバーに若手として加えていただいた1993年からである。当時の地理思想科研の合宿は、30歳台に突入したばかりの若手にとって、久武先生の「このバカタレが！」の洗礼を夜な夜な受ける修練の場であった。深夜の飲み会は時として久武先生の説教部屋と化し、同世代のある人などはウンザリした表情で精神的にもかなり応えていたように感じられ、わたしなども正直「バカタレが！」には辟易していた。わたしは当時デュルクム社会理論の空間論的読解といった作業に手を染めており、ある方の明治地理学史関係のご報告を「こんなテーマの何が面白いのか？」と、数年後に全く同じテーマに嵌まってしまふ己の姿を想像できるはずもなく内心嘯きながら、デュルクム関連の発表をしては逆に久武先生に不勉強な点へのツッコミを入れられてばかりいた。1993年9月25～26日に鳥羽市の「KKR 鳥羽いそぶえ荘」で行われた合宿で、わたしは「デュルクムの〈社会—空間〉理論」と題する発表を行ったが、その発表に対して同年10月2日付で久武先生から最初で最後の便箋6枚にも及ぶ長文のお手紙をいただいた。「先日の鳥羽では、色々お世話になりましたし、また貴兄の御発表に関して、失礼なことを申したのかも知れません。その際は何卒お許し下さい。」で始まる手紙で言及された「失礼なこと」がいったい何であったのか、今となっては思い出せない。しかしそれは決して「失礼なこと」などではなく、未熟なわたしが当然言われてしかるべき何事かであったのだろう。件の手紙の本题はそのことではなく、久武先生のご質問に対してわたしが何事か問い返したらしく、それに対する返事として久武先生は長文の手紙を認められたのである。しかし情けないことに、今のわたしは当時久武先生に対して何を問い返したのか思い出せず、従って久武先生が件の手紙のなかで

なぜ水津一郎の基礎地域論に対する石川栄吉の批判に言及されたのか、よく解らないのである。結局このときの発表内容は、論文として公表することなく現在に至っているが、不思議なことに、久武先生のご指摘が効いて発表内容をお蔵入りにしたという自覚がわたしにはずっとないのである。

わたしが久武先生の怒りにまともに触れてしまったと感じたのは、翌1994年12月17～18日に大津市の今は無き「さざなみ荘」で開かれた合宿においてである。わたしは「デュルクムの社会空間論—その意義と限界—」と題する発表を行ったが、その折に、デュルクム&モースの『分類の未開形態』の記述に基いて、ズニ族の世界観とプエブロ集落の空間分類を地図化して呈示し、こうした地図化はデュルクム&モースもやっていかなかったことだ、などとピノキオの鼻よろしく得意気に吹聴したところ、久武先生の逆鱗に触れることと相成ったのである。先生はデュルクム&モースの記述自体が、その元ネタであるカッシングの記述とは違い、さらにカッシングのレポート自体もズニ族の空間分類を示したものであってプエブロ集落の実際の姿とは異なることを、怒気を含んだ声でまくし立てられた。久武先生が、すでに1985年刊行の『講座考古地理学 第3巻 歴史的都市』のなかでズニ族のプエブロ集落の変遷を実証的に論じておられたことを知ったのは、それから暫くたってからのことである。ハタッリと知識不足のピノキオの鼻は無残に押し折られ、その場は居たたまれない雰囲気になってしまった。あれほど怒られたことは、大学院生のときにM3やりますと宣言して石川義孝先生の逆鱗に触れて以来なく、とにかく凄まじい洗礼であった。山本健児先生が、「あなたの言いたいこと自体は良く判りました」と発表後にフォローして下さったことが唯一の救いに感じられた。しかしそれで終わらないところが、久武先生の慕われる所以なのであろう。先生はそれ以来、時折りその一件に触れ、島津君はあのことがあったので論文にしなかったのですね、申し訳ないことをしました、などと声を掛けて下さったのである。しかし実は、大津で発表した時点でその内容はすでに『経済地理学年報』に投稿されて受理済みだったのであり、今からみれば小林 茂先生が若かりし頃に書かれた「風土論と地理学」と同じくらい

out-of-place な論文として同誌に掲載されている。おそらく経済地理学会の会員でなかった久武先生は、よもやそのような畑違いの雑誌に件の論文が出ているとは思われなかったであろうし、わたしも先生に面と向かって「実は経地年報に…」とは気恥ずかしくて言えなかった。あれほど批判されたものを臆面もなくペーパーにしているのか、と言葉にはされないにしても内心思われるに違いないと勘繰ったからでもある。しかしこの論文は、今では決して読み返さない前述の修士論文とは異なり、自分で書いた論文のなかでは、わたしの最も好きなものの一つであり続けている。



写真1 2005年10月8日
赤穂ハイツ（兵庫県赤穂市）にて

久武先生と最後に親しく言葉を交わさせていただいたのは、2005年10月8～9日に行われた、山野正彦先生の還暦をお祝いする、「景観論の行方／文化地理学のゆくえ」と題する研究会の席上においてである（写真1）。わたしは「地理学史研究の最前線－クリティカルヒストリーから知の空間論へ」と題する発表を行ったが、幸いにも？久武先生は遅れてお見えになったのでその場にはおられず、代わりに夕食後に発表した大城君が少しその洗礼を受けたようだが、下の写真はその夕食時のものである。酔っ払っていたとはいえ、何とも恐れ多いことをしかしたものである。水内俊雄さんがメールの添付ファイルでこの写真をあちこちばら撒いたときには仰天したが、写真に撮られたことはもとより、この時ばかりはかかる行為に及んだ記憶がない。もっとも、わたしは他人の肩を揉む癖があって嫌がられることは自覚しているのだが。

最後に、久武先生の学会や研究会でのご質問は、わたしに対してであれ、他の方に対してであれ、短い言葉では終わらず、溢れんばかりの知識と思考力のままに滔々と語られることが多かったように思う。そのため、記憶力に乏しいわたしなどは時として先生のお話しについてゆけず、ご質問の真意を汲み取れないままに終わることも度々であった。「アイツは俺の言うことが解ってない！あのバカタレが！！」と天国で怒っておられるかもしれない。諸事情で葬儀に参列できなかったことを彼岸の先生にお詫びするとともに、先生のご冥福を心よりお祈りしたいと思う。

地理思想科研と久武さん（山野正彦・水内俊雄）

後掲の資料は、山野が旧友久武君といっしょに若手として参加することになった、地理思想科研の第1期から第3期の、水津先生、竹内先生、野澤先生の代表にかかる山野が所有する科研関係の書類である。水津科研（資料1）、竹内科研（資料2）は、表現に語弊はあるが、旧世代と団塊の世代の交錯するメンバー構成となっており、付帯した1983年9月23-25日開催の八王子セミナーでの発表者一覧と（資料3）、久武さんの発表レジュメと全体も添えておく（資料4）。野澤科研になると、団塊の世代がひとつの中心となっていくことが書類からも見て取れよう（資料5）。そのときの研究集会の記念写真（写真2）を山野が所有していたので、あわせて掲載しておく。

なおこの科研の2年度、3年度目に水内が、野澤代表のものの教室助手として、科研メンバーとして奇しくも参加することになった。水内にとっては、思いもかけず地理思想のスクールに出会う、偶然的出来事であった。この写真2は、1985年9月14-15日に広島県の鞆の浦で行われた研究集会であり、ポスト団塊の世代の顔ぶれが拝見される。

島津氏の引用した写真1と同時に、水内が撮影したそのときの写真をさらに加えておきたい。この研究集会では、水内の世代からすると団塊世代のセットで山野、久武さんが地理学の知性として存在していた（写真3）。そして科研の夜には、両先生のご講

話，そしてその後に引き続きお説教がはじまった。
写真4は，夜もふけて説教時間に入った久武さんである。わたしも含め，深夜の及ぶ論戦の輪が繰り広げられていた。「ばかたれもんが」と，われわれの，そしてその後の1960年生まれ世代が一喝されながら，最後は記憶も定かでないまま夜明けを迎えることが常であった。大学紛争期を中心にお聞きしたいはなしは山ほどあった。残念でならない。



写真3 久武，山野さん談笑 兵庫県赤穂市にて 2005年10月8日撮影



写真4 夜更けの久武さん 兵庫県赤穂市にて 2005年10月8日撮影



写真2 野澤科研集会 広島県鞆の浦にて
1985年9月15日撮影

右から，青木伸好，水内俊雄，小野菊雄，久武哲也，熊谷圭知，水津一朗，山本健兒，山野正彦，野澤秀樹，中川浩一，栗原尚子，田中和子

山 野 様
研究分担者各位

昭和53年7月5日

研究代表者 水津 一朗

前略 かねて申請について御協力いただきました昭和53年度科学研究費補助金総合研究(A)は、下記のような形で実施されることになりました。

あなたの科研申請上の研究分担課題は、I 日本における地理思想と地理学の発達に関する研究 である。ただし、科研申請の目的の一端は、IGUのCommissionへの対応にあり、八月下旬以降にこの件も含めて、共同討議の機会などをもちたいと考えております。具体的なプランは、あらためて御連絡申し上げる所存でございますので、よろしく御協力下さいませよう御願ひ致します。

草々

研究課題		地理学的ランゲージ(表現と手段)の思想史—その東西比較—		補助金額	6,000 千円
研究組織 (研究代表者及び研究分担者)	氏名	所属機関部局・職	役割分担 (本年度の研究実施計画に対する分担事項を記入すること。)	備考((注)参照)	
	氏名	所属機関部局・職	役割分担		
研究組織 (研究代表者及び研究分担者)	水津 一朗	京都大学・文学部・教授	Ⅲ 総括		
	渡辺 弘	京都大学・文学部・教授	Ⅰ 日本における地理思想と地理学の発達に関する研究		
	中山 浩	京都大学・文学部・助教授	Ⅱ 諸外国における地理学的ランゲージの研究		
	石心 野	大阪大学・文学部・助教授	Ⅲ 総括		
	高橋 敏	京都大学・文学部・助教授	Ⅰ 日本における地理思想と地理学の発達に関する研究		
	野松 田	京都大学・文学部・助教授	Ⅱ 諸外国における地理学的ランゲージの研究		
	長谷川 秀	九州大学・文学部・助教授	Ⅲ 総括		
	小久武 雄	九州大学・文学部・助教授	Ⅰ 日本における地理思想と地理学の発達に関する研究		
	海野 一	九州大学・文学部・助教授	Ⅱ 諸外国における地理学的ランゲージの研究		
	船越 昭	九州大学・文学部・助教授	Ⅲ 総括		
	竹内 啓	九州大学・文学部・助教授	Ⅰ 日本における地理思想と地理学の発達に関する研究		
	計 20 名				

研究目的 (研究目的は、研究費交付の交付を受ける年限内に、何を、どこまで明らかにしようとするかがわかるように焦点を絞り、具体的に記入すること。)

近代地理学史、近代以前の地理学史、および地理学各分科の学説史、地理史、さらに地理学界の諸学会などには、本来、人類文化における空間認識そのものの表現の歴史として、総合的に研究すべきにもかかわらず、従来我が国においては、これらの専門家相互の研究成果の交流に欠け、日本や中国の地理学史と欧米地理学史との統一的理解への努力に不十分なものがあった。国際的な研究動向を捉え、ようやく最近になって、科学史、思想史の一環として、地理的表現手段の歴史を統一的に把握する必要性が認められ、地理学の発達史においてどのようなパラダイムが存在したか、また、空間的(地理的)認識と社会的行動との、構造的な関係が明らかになるに至った。(しかし、欧米の研究による研究は、ヨーロッパ中心の偏重が顕著であり、非ヨーロッパ世界における空間認識とその表現諸手段(hangovers)を人類文化史のなかで位置づけるのに、今日まで成功していない。日本には長い地理的思想の歴史があり、かつ中国地理の研究にも顕著な成果を挙げ、欧米地理学の影響下に、日本に近代地理学が成立してから、すでに1世紀を経過した。本研究の目的は、このような我が国の地理学の独自の状況と踏まえて、西洋と東洋を対比しながら、人類による空間認識がどのようになされ、どのように表現されてきたか、ということと比較研究し、1980年IGUの地理学史コンgres「地理学的ランゲージの思想史—その東西比較—」に討議するところにある。

本年度の研究実施計画

上記の目的を達成するため、下記のテーマごとに、資料の蒐集と研究を行ない、問題点の発見と整理に努めて、空間認識とその表現についての共通理解を目指す。

- I 日本における地理思想と地理学の発達に関する研究
- II 諸外国における地理学的ランゲージの研究
- III 総括

(様式2)

※ が(ナ)	※ 自然史(ナ)	※ 環境(ナ)	※ エネルギ	※ 特(定)研	※ 総合(A)	※ 試験(B)
				(1)		
(必ずこの用紙を使用すること。)						
昭和55年度科学研究費補助金				(がん特別研究(1)・自然災害特別研究(1)・環境科学特別研究(1)・エネルギ特別研究(1)・特定研究(1)・総合研究(A)・試験研究(1)) 実績報告書(収支決算報告書) 昭和56年3月30日		
文部大臣殿				所属機関の所在地 東京都国立市中2丁目1番地 (郵便番号186) 所属機関・部署・職 一橋大学 社会学部 教授 氏 名 47 内 啓 一		
研究課題	地理思想の伝播と継承に関する比較研究				交付を受けた研究費	6,000 千円
費目別収支決算表						
区分	合計	設備備品費	消耗品費	旅費	謝金	その他
実支出額の使用内訳	6,028,789 ^円	3,234,430 ^円	2,790 ^円	1,948,680 ^円	660,000 ^円	182,889 ^円
交付申請書に記載の研究費の使用内訳	6,000,000	2,870,000	67,000	2,053,700	647,500	361,800
研究組織						
役割分担	研究代表者及び研究分担者			交付申請書に記載の研究費	実支出額	備考
	所属機関・部署・職	氏・名				
総指揮官としての近代地理学形成者の地理思想の近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	一橋大学社会学部教授	内 啓 一	6,000,000 ^円	6,028,789 ^円	研究代表者による一括活用	
中国における地図学と地理学の歴史的研究。	大阪大学社会学部教授	海野 一隆				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	入江 敏夫				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	松田 信				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	永津 一朗				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	大阪大学社会学部教授	矢野 一彦				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	船越 雅生				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	大阪大学社会学部教授	中川 浩一				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	大阪大学社会学部教授	高橋 正				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	山本 利明				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	九州大学文学部助教授	野沢 秀雄				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	奈良女子大学文学部助教授	千原 裕				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	松本 正夫				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	大阪大学社会学部教授	小野 正寿				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	高橋 誠一				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	石川 孝治				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	戸塚 美大				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	甲南大学文学部助教授	成城 武蔵				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	源 昌久				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	京都府立大学文学部教授	石川 英子				
近代地理学におけるアフリカ地理学の発展とその国際化の歴史を明らかにし、その結果として近代地理学と日本地理学の関係に比較対照的考察を行う。	一橋大学社会学部教授	原 阿子				
合 計			24 名	6,000,000 ^円	6,028,789 ^円	

- (3) 研究代表者が研究費を結核して使用した場合は、研究組織の「実支出額」欄に「転付使用」と記入するだけでよい。
- (4) 費目別収支表及び「交付申請書」に記載の研究費の使用内訳」について変更の承認を受けているものについては、変更承認後の使用内訳を記入し「備考」欄にその承認の年月日を記入すること。
- (5) 研究組織のうち研究代表者又は研究分担者の交替あるいは研究分担者の追加、辞退の承認を受けているものについては承認事項、承認の年月日を記入すること。

課題番号	538022	研究代表者	竹内啓一	機関番号	
経理事務担当者の氏名と住所	栗原尚子 〒227-8581 (電話) 22-72-1100			12613	

資料 2 竹内科研実績報告書（1981 年 3 月 30 日）

1983. 9. 23-25
11月3日

研究会日程	
23日 (金)	P.M. 5:00 集合 (入浴時間 4:00 ~ 11:00 まで) 夕食 山野: 景観の解説とヒューマニスマスツ・ジオラマ
24日 (土)	A.M. 8:00 朝食 9:00 海野: 中世日本人の国土観 山本: 『宋政回覧実記』における地理的認識 昼食 12:00 中川: 文藝書庫の推移とアカデミー地理学 佐藤: 上記発表の 補足報告 13:30 竹内: イタリア地理学におけるパラダイム移行 夕食 17:30 野沢: 最近のフランス地理学の動向 — くに Groupe Dupont について
25日 (日)	A.M. 8:00 朝食 9:00 久武: 砂絵図再考 — モジュール思考について 10:30 解散

— 横大生

資料3 竹内科研研究集会日程表

1983年9月23-25日 八王子セミナーハウス

久武 哲也 (甲南大)

1983. 9. 25 (東京ハミ手)

「砂絵図再考 — モジュール思考 —」

No. 1

Reference

1. Roger M. Downs (1981), Maps and Metaphors (Professional Geography, Vol. 33, No. 3, pp. 287-293)
2. Christopher Board (1977), Maps and Mapping (Progress in Human Geography, Vol. 1, No. 2, pp. 288-295)
3. J. de Durand-Forest (1981), On Mandalas and Native American World Views (Current Anthropology, Vol. 22, No. 4, pp. 441-3)
4. M. S. Fleisher (1982), More on Mandalas, Archetypes, and Native American World Views (Current Anthropology, Vol. 23, No. 3, pp. 335-339)
5. M. E. Landsberg (1980), The Icon in Semiotic Theory (Current Anthropology, Vol. 21, No. 1, pp. 93-95)
6. Alfonso Ortiz (1969), The Tewa World: Space, Time, Being & Becoming in A Pueblo Society (Chicago: University of Chicago Press)
7. Vera Laski (1958), Seeking Life (Philadelphia: American Folklore Society)
8. F. H. Cushing (1992), Manual Concepts: A Study of the Influence of Hand-Usage on Culture-Growth (American Anthropologist, Vol. 5, No. 4, pp. 269-317)
9. Leslie A. White (1962), The Pueblo of Sia, New Mexico (Bulletin, No. 184, Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology)
10. (1942), The Pueblo of Santa Ana, New Mexico. (Memoirs, No. 6, American Anthropological Association)
11. J. B. Jackson (1953-14), Pueblo Architecture and Our Own. (Landscape, Vol. III, No. 2, pp. 11-12)
12. 久武 哲也 (1972), 「木造建築学」(砂絵図再考) 第1巻, 第1章, 第1章
13. Amos Rapoport (1969), House Form and Culture. (Englewood N.J.: Prentice-Hall Inc.)
14. 久武 哲也 (1979), 景観地図と砂絵地図 (甲南大学紀要 文芸部 32号 社会科学 特集 pp. 37-49)
15. (1980), 「建築と地形」(建築学) (文芸部 32-6, pp. 90-102)
16. (1982), 「砂絵図と地形」(建築学) (文芸部 34-2)
17. (1982), 「建築と砂絵図の地形」(建築学) (文芸部 34-2)
18. (1983), 「景観と砂絵図の地形」(建築学) (甲南大学紀要 文芸部 34-2, pp. 1-33)

I. はじめに

- 1) 砂絵図 Mandala, model, module (modules)
- 2) 砂絵図と景観
 - a) 砂絵図の1つのモデル (R.M. Downs, 1981)
 - b) 砂絵図の要素と景観の要素 (対立と本質)
 - i) 砂絵図の要素 (対立と本質)
 - ii) 砂絵図の要素 (対立と本質)
 - iii) 砂絵図の要素 (対立と本質)
 - c) 砂絵図の要素 (対立と本質) (R.M. Downs, 1981)
- 3) 砂絵図の要素 (対立と本質)
 - a) 砂絵図の要素 (対立と本質)
 - b) 砂絵図の要素 (対立と本質)
 - c) 砂絵図の要素 (対立と本質)

II. 空間の本質と砂絵図 …… フォルム・テマ・ケースの場合 ……

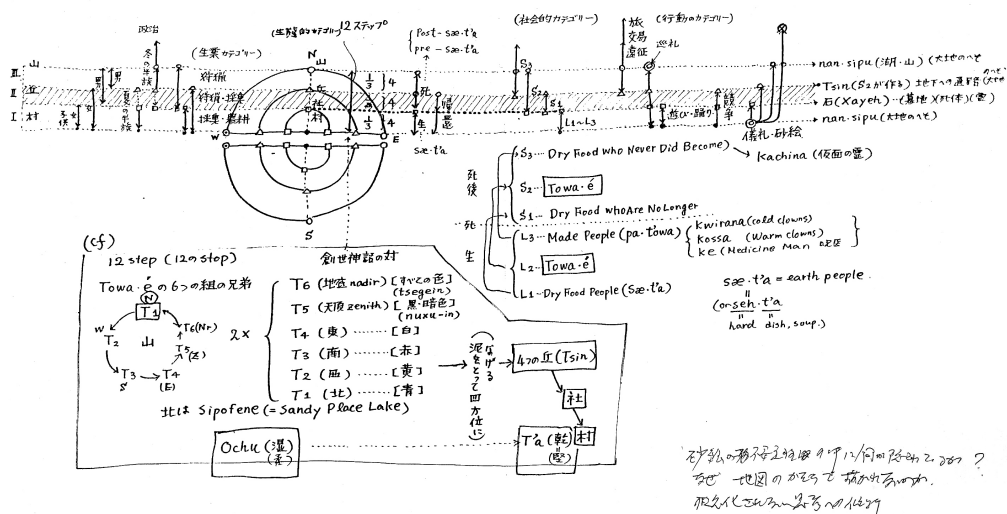
- 1) 砂絵図の本質
 - a) 砂絵図の本質 (Ochū → t'a; 砂絵図)
 - b) 砂絵図の本質 (3つの図と12のステップ)
 - c) 砂絵図の本質 (3つの図と12のステップ)
- 2) 砂絵図の本質
 - a) 砂絵図の本質 (Ochū → t'a; 砂絵図)
 - b) 砂絵図の本質 (3つの図と12のステップ)
 - c) 砂絵図の本質 (3つの図と12のステップ)
- 3) 砂絵図の本質
 - a) 砂絵図の本質 (Ochū → t'a; 砂絵図)
 - b) 砂絵図の本質 (3つの図と12のステップ)
 - c) 砂絵図の本質 (3つの図と12のステップ)

(A. Ortiz, 1969, L. White, 1942, 1962, V. Laski, 1958)

「砂絵図」の地形の再考

No. 4

大地 (= earth) → Nan = 砂絵 出現の場所 { Naya wha Town (ニヤハタウン)
 大地のへぞ (earth navel) → Nan-sipu (= Shipapua) 〃 { whe Town (ウェタウン)
 pingeh = middle place = 広場, Xayeh-Tā-Pingeh (社) Xayeh (右組社) - 「おれ」 ⇒ soul
 Bu' pingeh (田の広場) = (路傍の広場) (俗名)

資料4 八王子セミナーハウスでの研究集会
(1983年9月25日) 配布の久武発表レジュメ

氏 名	所属機関部局	職	役割分担 (本年度の研究実施計画に対する分担)	備 考
			(事項を記入すること。)	
澤田 秀一 津内 一朗 野水 一雄 竹中 浩 小川 菊 小丘 利 青木 伸 千田 好 山田 雄 久野 彦 山武 也 久源 久 山本 健 果原 昌 義部 健 古田 啓 田中 敏 熊谷 知	九州大学 文学部 京都大学 文学部 一橋大学 社会学部 茨城大学 教育学部 九州大学 教養部 九州大学 文学部 京都大学 教養部 奈良女子大学 文学部 大阪市立大学 文学部 甲南大学 文学部 淑徳大学 社会学部 法政大学 経済学部 お茶の水女子大学 文芸学部 成蹊大学 経済学部 京都大学 文学部 一橋大学 社会学部 九州大学 文学部	教授 教授 教授 教授 教授 助教 助教 助教 助教 助教 専任講師 助教 専任講師 専任講師 助教 助教 助教	総括 おお 現代地理学の発展 ドイツ地理学思想史 おお 認識論 現代地理学の 認識論 日本における明治以降の地理学史 地理教育史 ソ連地理学におけるマルクス主義認識論 アメリカ地理学における 実証主義 地理学と弁証法 地理学における 記号論 地理学における 解釈学的アプローチ アメリカ文化地理学における 構造主義的批判 日本地理学における 中国・欧米地理学思想の影響 ドイツ語圏地理学における 思想史 スペイン地理学における 空間認識論 フランス地理学における 認識論的諸問題 歴史地理学における 実証主義的伝統 理論、計量地理学と 論理実証主義 厚生地理学の方法	
計 17 名				

資料 5 野澤科研交付申請書 1984 年 6 月 (170 頁 資料 5 とペア)

様式 1

昭和59年度科学研究費補助金交付申請書										
昭和 59 年 6 月 日										
文 部 大 臣 殿										
研 究 代 表 者	所属機関の本部の所在地	福岡市東区箱崎6-10-1 (郵便番号 810)								
	所属機関・部局・職	九州大学 文学部 教授								
	氏 名	野澤 秀樹 ㊟								
下記のとおり研究を実施したいので、科学研究費補助金 <table border="1"> <tr> <td>がん特別研究 (1)※</td> <td rowspan="6">} の交付を申請します。</td> </tr> <tr> <td>自然災害特別研究 (1)※</td> </tr> <tr> <td>環境科学特別研究 (1)※</td> </tr> <tr> <td>エネルギー特別研究 (1)※</td> </tr> <tr> <td>特定研究 (1)※</td> </tr> <tr> <td>総合研究 (A)※</td> </tr> </table>				がん特別研究 (1)※	} の交付を申請します。	自然災害特別研究 (1)※	環境科学特別研究 (1)※	エネルギー特別研究 (1)※	特定研究 (1)※	総合研究 (A)※
がん特別研究 (1)※	} の交付を申請します。									
自然災害特別研究 (1)※										
環境科学特別研究 (1)※										
エネルギー特別研究 (1)※										
特定研究 (1)※										
総合研究 (A)※										
記										
研究課題	地理学思想における認識論的諸問題									
研究の目的	いわゆる計量革命以後、地理学においては、様々なパラダイムの展開が見られる。それは、大きく分ければ、実証主義とヒューマンストリック地理学の方に分けられ、前者は論理実証主義、行動主義、後者は現象学、解釈学、構造主義、あるいはマルクス主義等、様々な思想を背景とする。本研究の目的は、このような百花繚乱の状態にある地理学研究の方法に對し、思想的検討を加えることにある。ここでは、とりわけ、そのために必要とされる、個別科学としての地理学の認識論の問題を、空間意識、空間認識、空間表象など、これまで地理学の場で具体的に積み上げられてきた諸テーマの再構成を通じて、根底的に追究することを目指すものである。									
本年度の研究実施計画	主要な活動は、(1) 研究集会における報告と討論、(2) 必要な資料・文献の蒐集と整理検討、(3) 演稿、ポスターの作製、となる。研究分担者全員が参加する研究集会は年2回、福岡と京都にて行なう。その他に、東京・京都にて、数人の集まる研究会も開催する。具体的な研究項目と研究分担者の担当は以下の通りである。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 伝統地理学(環境論・景観論・地誌論等)の認識論的諸問題 [水津・山本] 2) 理論・計量地理学の实証主義的性格とその認識論的問題 [広地・田中] 3) 計量革命以降の様々な地理学思想における認識論的諸問題 <ol style="list-style-type: none"> i) 行動主義地理学の問題構制 [田中] ii) 現象学的・解釈学的地理学の認識論 [田中・山野・久武] iii) 構造主義的地理学の認識論的構造 [竹内・田中・久武] iv) マルクス主義的地理学の認識論 [竹内・小野・青木] v) その他 ヒューマンストリック地理学の方法とその認識論の根拠 [青木・山本・栗原・石巻・熊谷] 4) 日本における地理学思想の書誌的考察とその認識論的根拠 [中川・酒・吉田] 5) 地理的言語・記号・図・映像による地理的認識の方法 (演稿・ポスターには地理学史研究) 									
(注) 1. ※印の箇所は、必ず不要の文字を消すこと。	課題番号	5938002/	研究代表者	野澤 秀樹						
2. 補助金の執行に当たっては「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律」(昭和30年法律第179号)等の適用を受けるので留意すること。	連絡者 (研究代表者又は経理事務担当者)	野澤 秀樹		092-641-1101 (電話 内線 2760)						
	機関番号	17102								

久武先生から与えられた課題（高木彰彦）

久武哲也先生、先生に初めてお会いしたのは1987年10月に九州大学で開かれた日本地理学会の巡検に参加した時でしたね。一泊二日の巡検で、「阿蘇山およびその周辺の地形・水文環境と伝統的土地利用」というテーマでした。阿蘇山見たさに参加したこの巡検は、小林 茂先生（当時九州大学）が案内責任者で、久武先生も案内者に加わっておられました。甲南大学の先生がどうして案内者なのか首を傾げましたが、説明を聞くうちに、熊本県ご出身だということで納得しました。しかし、この時には案内者としての説明をお聞きしたのみで、しかも、先生は途中、熊本空港で下車されてしまったので、無責任な案内者だと思ったくらいで、お話しした記憶はありません。

その後、1988年か89年の秋、人文地理学会終了後に京都のピアホールで、当時、奥様を亡くされて落ち込んでおられた樋口忠成さんを慰めるという趣旨の会を、吉田敏弘さん（当時大阪学院大学）が中心となって開かれて、その会に参加した時に親しくお話しさせていただいたと記憶しています。その宴席での久武先生は、後輩の吉田さんから、「哲一っ」と呼び捨てにされる、三枚目風のおっさんという印象で、1987年に『人文地理』誌に発表された「アメリカ文化地理学の成立と発展—C.O.サウアーとパークレー学派の役割—」という展望論文を拝読して受けた、繊細で緻密な著書像とはおよそかけ離れていて、そのギャップの大きさに驚きました。

その後、大阪市立大学の水内俊雄さんが代表者となって1995年から始まった地理思想の科研費のメンバーに加えていただいたことで、先生とのおつき

あいも深まっていきましたね。この科研費による研究活動も、水内さんが2回代表を務めた後、山野正彦先生が代表となられ、久武先生とは10年以上にわたって科研費の研究活動で一緒にさせていただきました。2006年からは小生が代表となり、先生にもメンバーに加わっていただきましたが、研究集会には一度も参加して頂けないまま、2007年7月28日逝去されてしまいましたのは返す返す残念でなりません。

2005年6月に亡くなられた竹内啓一先生への追悼文に、「地政学関係の研究において、小生が新たな研究テーマを着想し文献を調べていくうちに、すでに竹内先生が同様の研究を発表されていて、常に研究の後追いをしていた」という趣旨の内容を書いたことがあります。久武先生も同様に、地理思想関係のテーマで私が関心を持ち、次に取り組んでみようと考えたテーマを先生がすでに行われていました。小生は、この地理思想の科研には、地政学研究を深めることで貢献できるのではないかと考え、ゆくゆくはアメリカの地政学について調べてみようと思っていましたので、何かの会合の帰りの電車の中で、Isaiah BowmanのThe New Worldを読んでみるつもりだ、とお話ししたところ、先生はすでにその本を読んでおられたようで、この本は何回か版を重ねていて、それぞれの内容を比較検討することが必要であるといった趣旨のことを話されましたね。私はコピーだけはしたものの、その後読むこともなく、同書は書棚に埋もれたままになっています。先生から与えられた課題としていつの日か結果を出したいと思っています。800頁にも及ぶ大著ゆえ読み終わるのがいつになるのか検討もつきませんが、どうぞ気長にお待ち下さい。

